

2018 年度海外日本語教育実習報告

—北京師範大学での気づきと学び—

松本匡史・伊澤佳那依・野崎那由・町田和輝

【キーワード】

中国、北京師範大学、海外教育実習、実習報告、日本語教育

【要旨】

本稿は、2019年3月に北京師範大学で行われた海外教育実習の実習報告である。2週間の実習授業報告と、中国での気づきや、そこからの学びを記述した。実際に海外で授業や生活をするにより、多くの学びを得ることができた。

1. はじめに

本稿では、埼玉大学の学部生および大学院生（以下実習生¹）が、2019年3月10日から23日までの間におこなった海外日本語教育実習について報告する。実習先は中国にある北京師範大学外文学院の日本語学部である。

本稿では2週間の実習報告に加え、各実習生が感じた気づきと学びについて述べる。コルトハーヘン（2010）は、現在の多様な教育環境において、個別の教授法などの技術を学ぶことも大事だが、経験から自らの省察を通しての気づきと学びにより、教師個々の方略を考えることも大事であると述べている。



北京師範大学

1. 教師の専門家としての学びは、学習者の内的な必要性を伴うとより効果的になる。
2. 教師の専門家としての学びは、学習者の経験に根ざすとより効果的になる。
3. 教師の専門家としての学びは、学習者が自身の経験を詳細に省察²するとより効果的になる。（コルトハーヘン 2010:65）

¹ 教育実習に参加したのは、埼玉大学の学部生3名（女2、男1）および埼玉大学大学院の院生1名（男1）である。以下ではこの4名を実習生と表記する。

² 「省察」とは reflection のことで、内省、反省、振り返り、リフレクションなどの訳語が

上記の「学習者」とは教師自身のことである。つまり教師教育のためには、外部からの指導より、自身の省察による気づきを通しての学びが効果的であると述べている。

日本語教師としての気づきもそうだが、それに加え、海外で生活するという事は、日本人としての気づきも多分にある。日本では常識と言われていることが、海外ではそうではないというのは多くあり、「百聞は一見に如かず」というが、まさにその通りで、知識を持つことも大事だが、実際に体験することはそれに勝るだろう。視野を広げ、柔軟な思考を持つためには、海外での失敗や驚きなどから、何かに気づき、そこから何かを学び取ることが人としての成長につながるのではないだろうか。

佐久間（2014:116）では、「グローバル人材」³の育成に必要なことの1つとして、海外で現地の人と交流し生活することの重要性を説いている。「青年たちが、その国の人々と苦楽を共にする経験を通して視野を広げ、自分や自分の国（日本）を超えて、「グローバル人材」の“核”とでもいうべき、多くの人々と“協働”、“共生”する姿勢と能力を獲得していている」と述べ、実際に海外で苦労や喜びなどを体験することで、人としての成長が促されるとしている。

日本語教師としての気づき、学び・成長も大事なことであるが、人としてのそれも実習生にとっては重要なことであり、海外での生活は成長を促す良い機会になるだろう。本稿では、実習報告に加え、実習生自身の視点からの気づきと学びについて述べ、この実習を振り返る。

2. 実習報告

2-1 概要

実習は2週間にわたって行われ、1週目は北京師範大学（以下 BNU⁴）の先生方の日本語クラスの授業参観をし、2週目から実習生が授業を担当した。実習生の担当授業は表1に掲載する。表の※印は1年生の授業を表し、ないものは2年生である。1つの授業は2時限分を使って行われ、1時限は45分で、時限間には10分の休憩時間が挟まる。つまり、1つの科目での授業時間は90分となる。日本との違いは、朝が8時からと早いことと、4限後の昼休憩が2時間と長いことが挙げられる。教科書は、主に基礎日本語シリーズを使用していた。

実習生の授業は、2人1組で授業を行い、残り2人は見学となる。見学中の実習生も授業には参加しており、学生⁵のグループワーク活動への参加や机間巡視などを行った。

使われることもある。

³ 「グローバル人材」の意味するところは曖昧で、文脈により様々であるが、ここでは「(国際的な視野を持ち、)異質な他者に関心を寄せ、コミュニケーション、協働、共生のできる人、もしくはその努力をする人」(佐久間 2014:100)とする。

⁴ 北京師範大学 (Beijing Normal University)、以下 BNU と略して表記する。

⁵ 本稿では「学生」とは、北京師範大学の大学生を指す。

授業前には、担当の先生との話し合いや教案提出などをし、ペアで授業準備を行い、授業後は担当の先生からのフィードバックを受けた。

学生のレベルは、高校から日本語を学んでいた学生と、大学から学び始めた学生がいるため一律ではないが、1年生は初級、2年生は初中級～中級あたりである。1年生は1週間で日本語専攻科目を7つ受講しており、2年生では選択の日本関連科目を含め9つ受講している。ほとんどの学生が2または3年次には、日本への1年ほどの留学をする予定である。日本語を学ぶきっかけとしては、アニメなどのポップカルチャーが好きだからという理由が多い。しかし、日本語専攻の学生ということもあり、将来、日本関連の研究者や教師を目指している学生が多く、しっかりした目標を持っており、モチベーションは高い。

表1 実習生の担当授業時間割

	1・2限	3・4限	5・6限	7・8限
月		中級日語 (野崎・町田)		日語写作 (伊澤・松本)
火	初級日語※ (伊澤・町田)		日語朗読※ (野崎・松本)	
水	日語口語 (伊澤・松本)		日本歴史 (野崎・町田)	
木	初級日語※ (町田・松本)	中級日語 (野崎・伊澤)		
金		日語語法 (伊澤・松本)	中級日語聴力 (野崎・町田)	
	1限 8:00-8:45 2限 8:55-9:40	3限 10:00-10:45 4限 10:55-11:40	5限 13:30-14:15 6限 14:25-15:10	7限 15:30-16:15 8限 16:25-17:10

※印は1年生の授業、ないものは2年生の授業。

2-2 実習授業報告

2-2-1 3月18日(月)実習授業

初めての实習授業は3・4限の2年生「中級日語」で、担当実習生は野崎・町田である。このクラスでは、他クラスで文法などを学んだあと、それを用いての産出のためのクラスである。1週目では、「私が好きな○○」と題して、好きなアニメ・映画・小説などをパワーポイント（以下ppt）を用いて発表を行っていた。筆者⁶の1週目授業参観時の学生の印象は、説明文だけではなく、自らの考えなど抽象的なことも上手く表現できており、とても1年間学んだだけでは思えなかった。筆者は日本の日本語学校や、中米コスタリカの大学での教授経験があるが、それらの経験と比較してもBNUの学生は非常にレベルが高いと感じた。非漢字圏のコスタリカと比べるとは適当ではないが、や

⁶ 筆者とは執筆者の1人の松本匡史を指す。3章以外は全て松本が記述しており、記述されている経験や感想などは全て松本の主観である。

はり日本語専攻の学生は目標がはっきりしているため、学ぶ意欲が高く、進度も早いのだろう。

この日の「中級日語」では実習生は、BNU の先生から「面接」というテーマが与えられており、宿題で出してあった履歴書を用いて「面接」の活動を行った。授業の流れは、まずは宿題の履歴書の添削をし、よくあるミスを指摘した。その後、

「面接」の入室から退室までの一連の流れの説明、練習、グループでの発表である。グループ内発表

では、面接官は実習生が務め、その他の学生は評価シート用いて、面接練習中の学生を評価した。グループ内で評価点が一番良かった学生が、最後に前で発表した。

この授業でもそうだが、評価シートを用いて他学生を評価するということが多いことに驚いた。活動のポイントを理解して、そのポイントを鑑み、学生自ら他者を判断することができるようにするためであり、授業でポイントを説明するだけより、学生の理解度や集中度も上がると感じた。

午後からの実習授業は 7・8 限の 2 年生「日語写作」で、担当実習生は伊澤・松本である。この授業はいわゆる writing で、何かしらの書く活動が中心になる。1 週目の授業後、BNU の先生から「年賀状・寒中見舞い・暑中見舞い」というテーマが与えられていた。実習授業ではそのうち、年賀状をメインにして授業を組み立てた。寒中・暑中見舞いについては、現在の日本、特に若者は行わないことが多いため、軽く触れるだけにとどめた。

まずウォーミングアップで中国のお正月についてグループで紹介しあい、その後、日本のお正月についての文化紹介で導入を行った。年賀状の歴史や現状などを説明し、年賀状の実際の書き方を練習した。白紙を用いて、BNU の先生と実習生への 2 種類の年賀状を書き、目上の人と友達相手に対する書き方の違いをポイントにし練習した。

この授業では、学生が予想より年賀状書きに熱中し、時間が足りなくなってしまった。学生のことをまだ把握できていないため、どのくらい時間を取れば良いのかわからなかったことが原因だが、この授業以降、活動時間を多めにとるように心掛けた。



「面接」の練習

2-2-2 3月19日(火)実習授業

午前の実習授業は 1・2 限の 1 年生「初級日語」で、担当実習生は伊澤・町田である。1 年生に対しては初めての实習授業である。一部学生を除き、大半の 1 年生は大学入学してから 4 ヶ月しか日本語を学んでおらず、日本語での発話はまだ慣れていなく、こちらの日本語での指示も聞き取りが難しそうであった。1 週目の授業では、長文を読み、その構成などをグループで発表するというものであった。この授業に限らないが、BNU の日本語授業は、グループワークや発表などが多いのが特徴で、学生同士や教師とのイ

ンターアクションを重視しているように見える。日本では一般的な教育手法である、オーディオ・リンガルやコミュニカティブ・アプローチは目にしなかった。

実習授業では、学生全員が発話することを目標に、日本語で劇を演じることにした。与えられていたテーマは「動物の気持ち」であったため、事前課題で動物の絵を出し、学生にはそれについてストーリーを考えさせた。そして、授業中グループで話し合い、劇を完成させ、発表した。劇の発表では学生が恥ずかしがるのではないかと危惧していたが、そのようなことはなく、みな積極的に参加していたのが印象的だった。

この授業のフィードバックで BNU の先生から、「成果物より学習過程を重視する」という話を聞き、学生同士のインターアクションの重要性を知ることができた。授業を組み立てる際は、いつも成果物、つまり何らかの活動を重視してきたが、過程についてはあまり目を向けたことがなかったため、新しい考えを得ることができた。

午後からの実習授業は 5・6 限の 1 年生「日語朗読」で、担当実習生は野崎・松本である。この授業では「感情を込めた・込めない読み方」というテーマが与えられていた。前週で「文節に切る、文節を意識した会話」というテーマで授業が行われていたので、今回の授業では、文節に切ることと、その切った文節に感情を込めた発話ができるようにすることを目標にした。導入、説明を行い、最後に活動として感情を込めた発話で「今までで一番〇〇話」を発表した。先生からのフィードバックで、日本語専攻である BNU の学生を意識した授業をするようにとアドバイスを頂いた。日本語の専門的な話は退屈であったり難しすぎるかもしれないと敬遠していたが、次からは多少専門的な話や日本で役に立つことなどを入れるようにした。

2-2-3 3月20日(水)実習授業

午前の実習授業は 1・2 限の 2 年生「日語口語」で、担当実習生は伊澤・松本である。与えられたテーマは「対談」である。この授業では、ある 1 つのテーマに対して自分の意見を言い、対談相手と意見の擦り合わせができることを目標にした。前週でグループでのインタビューを行っていたので、それとの違いを説明し、相槌や接続詞の使い方など多少難しいことも説明した。対談のテーマは 3 つで、「世界の不平等解決のためにどうしたら良いか」「自国の文化の魅力を伝えるにはどうするのが良いか」「良い働き方とは何か」を設定した。これらのテーマについて、2 人で対談し意見をまとめる。その後、相手を変え別のテーマ



劇を演じる学生



実習生と「対談」する学生

マで対談する。2人で対談し、別の1人を評価者として、評価表を用いて対談を観察させ、フィードバックまで行わせた。

対談テーマは難しいものであったが、自分の意見をまとめる時間を多く取り、対談のポイントを明確に示したため、活動の対談では積極的な会話が飛び交っていた。

午後からの実習授業は5・6限の2年生「日本歴史」で、担当実習生は野崎・町田である。前週に見たこの授業は講義型の授業で、他の授業とは異なっており、科目内容を考えれば当然であるが、学生の日本語での発話機会はほとんどない。実習生の授業内容は、「日本の学問史・大学史」をテーマにした講義であった。内容は難しいものであったが、日本の大学への留学を考えているBNUの学生たちは興味深そうに聞いていた。

2-2-4 3月21日(木)実習授業

はじめの実習授業は1・2限の1年生「初級日本語」で、担当実習生は町田・松本である。与えられたテーマは「私のエコライフ」である。前週のこの授業では、教科書を用いて、長文読解やそこに使われる文型の説明を中国語で行っていた。実習生は中国が話せないので、文型説明ではなく、教科書のテーマに沿った、学生自らの意見を日本語で発表するという目標を立てた。導入・説明をした後、グループでの話し合いと発表の時間にした。発表テーマは「環境問題について私たちができること」で、環境問題はグローバルな問題であるが、それを身近に捉え、曖昧なものではなく具体的に自分たちができることを発表するというものである。テーマが少し難しかったため、1年生には不適當かと不安だったが、発表のポイントを指導したり、話し合いの時間を多めに取ることにより、問題なく自らの意見を発表できていた。



「環境問題」について話し合い

他の授業でも感じたことだが、学生は少し時間にルーズなところがあり、活動を時間通りに終わられないことが多く見られた。そのため、日本では時間厳守が大事であり、その期限内で作業を終わらさなければならないことを説明し、期限時間を板書し注意を促した。しっかり説明すれば学生も納得したようで、時間通りに進めることができた。

次の実習授業は3・4限の2年生「中級日本語」で、担当実習生は野崎・伊澤である。この授業ではBNUの先生から「教科書13・14・15課の総まとめ」というテーマが与えられていた。そのため、実習授業では、これらの課のまとめの発表で、一番重要な情報は何か、何が言いたいのかなどをグループでまとめて発表を行った。残りの時間で、この課の文法について事前に質問を募り、その文法質問に対する説明を行った。例えば「官民挙げて様々な取り組みが...」という文では、なぜ「官民」と「挙げて」の間に助詞が入らないのか。その他には「こうした問題に象徴されるように...」では、なぜ助詞

「に」を使うのかなどの質問があった。中国語には助詞がないため、全体的に助詞に関する質問が多かった。

2-2-5 3月22日(金)実習授業

午前の実習授業は3・4限の2年生「日語語法」で、担当実習生は伊澤・松本である。この授業は、文法についての授業で、与えられたテーマは「～てください・お～ください・ただいただけませんか」で、この3文型の使い分けを理解するというのが目標である。文法説明をし、例文作りや問題などを通して理解を深めた。その後、グループでこの3つの文型のどれかを使ってロールプレイを作るという活動を行なった。簡単な場面・状況はこちらが提示し、その場面に応じた適切な文型が使えるかどうかを目的とし、最後に学生自ら文法説明をすることにより、理解度を高めた。BNUの学生は、みんなの前で発表するという事に慣れており、日本のように恥ずかしがったりすることなく、みな積極的に演じていた。



LL 教室での授業風景

午後からの実習授業は5・6限の2年生「中級日語聴力」で、担当実習生は野崎・町田である。この科目は、いわゆる listening の授業で LL 教室を使って行われる。教科書に沿って「病気」というテーマが与えられていた。実習授業は教科書を使って進め、前作業、本作業、後作業があり、逐次テーマについての話し合いがあり、その後 CD を聞き取るというものである。教科書に載っていない日本の情報も入れながら授業を進めたこともあり、学生の関心は高かった。

2-3 実習授業内容以外について

ここでは上述したこと以外について簡単に触れる。まず住居についてだが、実習生は BNU 敷地内にある「京師大厦」というホテルに泊まっていた。2人部屋であったが、非常に快適に過ごすことができた。日本では大学内にホテルがあること自体考えられないが、日本の一般的なホテルと遜色なかった。洗濯は有料サービスのため、実習生は手洗いをしていたが、疲れ切った夜に手洗いをするのは骨が折れた。



学食の様子

次に食事に関してだが、朝食はホテルでバイキング形式のものを毎朝食べていた。パンやシリアル、サラダなど中華料理以外のものもあり、飽きることはなかった。昼食は学生と一緒に学食で食べていた。BNUには学食が6、7つほどあり、昼時にはいつも混

雑している。学食では学生 ID カードでの支払いしかできないため、学生に払ってもらわない限り食べることはできず、現金での支払いはできない。実習期間中に実習生をサポートをする日本語学科 2 年生の学生チューターが 3 人おり、昼食はこの 3 人の ID カードで支払いを済ませ、最終日にまとめて現金で返した。夕食も主にこのチューター 3 人と行動を共にしていた。学食に行ったり、学外に食べに行ったりした。中国ではどこでもキャッシュレス化が進んでおり、学生も財布は持っておらず、もちろん現金も持っていなかった。携帯電話があれば、バスでも地下鉄でもレストランでも全て事足りるようだ。

2 週間は授業準備で多忙だったが、オリンピック公園や故宮博物館に行ったり、1 年生と餃子屋に行ったりし、BNU の学生と授業外でも交流をした。実習生 4 人は中国語がほとんどできないため、学生は皆、拙いながらも日本語で積極的にコミュニケーションを取ってくれて、非常に良い交流ができた。

今回の実習で、BNU の 8 人の先生方の授業を見ることができ、さらに、実習生の授業についてアドバイスを受けることができ、非常に勉強になった。筆者は日本とコストリカで教授経験があるが、BNU での授業スタイルは今まで体験したことがないものばかりであったため、とても良い経験になった。具体的には、グループワークや発表が多く、学生同士や教師とのインターアクションを重視しており、学生の積極的な発言につながっていると感じた。

3. 実習生の気づきと学び

ここでは、今回の海外実習での実習生の気づきと、そこからの学びについて述べる。

3-1 実習を終えて（伊澤佳那依）

2 週間の実習を通して多くのことを経験した。それらは、日本語教育に関するだけでなく、海外の文化に自分で触れたからこそその学びもあった。ここでは、大きく 3 つのことについて述べていきたい。

1 つ目の学びは、日本語を実際に教えることの難しさである。大学では、日本語の文法に関する講義をいくつも受講していたが、それらが実際に役立つことは少なかった。例えば、「将来と未来はどう違うのか」、「興味と趣味の違いは何か」という質問を学生から受けた。今落ち着いて振り返ってみると、少し考えれば答えられそうだが、その場でスラスラと説明はできなかった。また、日本語を教える上で日本の文化を教える必要性とその難しさを学ぶことができた。中国というまったく別の国で育ち、今もそこで生活している学生に教える難しさは、日本の日本語学校では体験できなかったと考える。中国へ実習に行ったからこそ、この難しさを体験できた。

2 つ目に、中国人学習者の学習意欲に驚かされ、日本の大学生への危機感を覚えた。北京師範大学では、朝 8 時から授業が始まり、お昼を挟んで午後も授業がある。加えて、5 時半頃に夕食を食べ、その後にも授業がある。学生は、予習、復習を進んで行き、夜

遅くまで図書館や食堂で勉強をしていた。授業は誰一人眠ることなく、全員が熱心に講義に耳を傾け、質問があるときにはすぐに質問をしていた。もちろん、日本にも真面目な大学生はいると思うが、中国ほど多くはないと考える。熱心に学習する中国の学生を見て、日本の教育への疑問を感じさせられた。

3つ目の学びは、日本語教育のスタイルである。私は、日本語の授業とは、文法を講義形式で説明するものというイメージを持っていた。実際、私が受けた外国語、英語教育もそのようなものだった。しかし、実際の北京師範大学の日本語の授業は、学生がグループで話し合ったり、発表をしたりする授業がとても多かった。講義を聞くだけの授業よりも学生はいきいきとしていて、発表の場面では一人一人がクラスメイトの前で日本語を披露していた。学生参加型にすることで、学生の学習言語の発話が増え、コミュニケーション能力が上がることを実際に見て学んだ。加えて、多くの授業で、授業内容とは別の発表があった。たとえば、教科書では動物に関する課を勉強中だが、その授業の前に故郷について ppt で学生が発表をしていた。これは、学生が当番制で事前課題として与えられているという。教科書にこだわらず、学習者が日本語に触れる機会が増えるような工夫がされていた。

2週間の実習で、自分の課題を見つめなおすことができた。加えて、どのように授業をするのが学生にとって最適なのかを考える重要性、実際に考える難しさを体験できた。この経験を忘れずに、今後に活かしていきたいと考える。

3-2 北京に行って感じた中国（野崎那由）

私は今回の北京での日本語教育実習を通して、同じアジア圏でも中国と日本で異なるところが多くあることに気づいた。車の量が多いこと、信号はあまり守らないこと、夕食の時間が早いこと、現金をほとんど使わずに生活ができることなど、例を挙げればキリがないが、私が一番違うと思ったことは中国には多様性を受け入れる文化があると感じたことだ。

私が中国にこのような文化があると思った理由は、同性愛が学生たちの中で広く受け入れられていたからだ。広くといっても、今回は実習のため実習先の学生としかこのことについて話していないため、中国全土でこのような傾向があるとは言えないが、少なくとも日本よりも LGBT を受け入れる精神があると私は感じた。実際に大学内で同性同士の恋人を見かけたが、周りの学生は全員それを知っていたし、そのことについてマイナスの感情を抱いている学生はいなかった。その他にも、友達が同性愛者という学生や自分の好きな人が同性愛者という学生も存在し、中国では自分が同性愛者であることを告白している人が自分の想像より多くいて驚いた。このことを聞いたとき、私は日本のことを思った。日本でも 2015 年に渋谷区で同性婚を認める条例ができ、だんだんと同性愛を受け入れるようになってきたと思うが、制度的に同性愛を認める動きが出てきても人びとがそれを受け入れていないように感じる。実際に私たちの周りで、自分は同性愛者であると告白している人はいるか考えると、そのような人は少ないのではないかと

思う。私は 22 年間生きていて自分の周りで同性のカップルを見たのは 1 回だけだった。きっと日本でも同性愛者は思ったよりいると思う。しかし、そのことを聞いたことが少ないのは、日本は少数の意見を持った人たちが生きにくい社会だからだと私は考える。日本人は多数派の意見に合わせ、みんなと同じなら安心する傾向が特に強い。これは、言い換えれば多様性がない社会である。このような社会では少数派の意見の人たちが生きにくく、自分の意見を声を大にして主張できない。多様性のある社会にするためには、日本も中国のように多数、少数にこだわらず様々な考えを受け入れることができる社会になるべきだ。

また中国でこのような現象が起こるのは、中国人が日本人とは違った心の温かさを持っているからだと私は思う。私は 2 週間北京に滞在して中国人の心の優しさに感動した。特に感動したのは、バスに乗ろうとしたときの出来事だ。私たち実習生は外貨両替で 100 元札しか持っていなかったため、バスの乗車賃である 2 元をちょうど払うことができなかった。そのとき私たちのお世話をしてくれるチューターの学生が周りの大人に声をかけてくれて、全く知らない男性が私たちに 5 元くれたのだ。私はこの出来事が中国の首都である北京で起こったことに驚き、感動した。東京に置き換えて考えるとこのようなことは絶対と言っていいほどないだろう。優しさを感じたのはこの出来事だけではない。私たちが研究室の鍵を開けるのに苦戦していたとき、通りかかった女性が全く言葉が通じないのにも関わらず、鍵を開けるのを助けてくれたこともあった。また、学生もみんなとても親切だった。日本人に多い人見知りも全くなく、学生たちはみんな進んで私たちに接してくれてとても嬉しかった。私は中国と聞くとどうしても反日感情が強い国という認識があったため、私たち日本人は冷たくされることがあるだろうと思っていたが、この 2 週間で嫌な思いをしたことは 1 度もなく、中国は人と人のつながりを大切にする国なのだと感じた。

今回の実習でテレビや教科書で見ただけで想像していた中国と実際の中国はかなり違いがあることを感じた。インターネットが発達している今、海外に行かなくてもその国の情報は検索するだけで知ることができる。しかし、その国のことを本当に知ることができるのは、実際にその地に足を運び、現地の人と交流することが一番の方法だと実感することができた。

3-3 実習を通した気づきと学び（町田和輝）

本節では、この実習プログラムの良い点と検討すべき点について、気づいたことと共に記述する。まず何よりの良い点として、多くの学びが得られる課程となっている。それは、後述する教員としての学びだけでなく、同年代の学生の実態や文化的な学びをも含め、実りある実習だったと感じた。

私たちは大学キャンパス内のホテルに居住していたこともあり、実習期間中のほとんどをキャンパス内で過ごしたため、授業外でも学生との交流機会に恵まれていた。学生と話すうちに、その殆どが 3 年次から日本の大学へ留学することを予定していることが

分かった。理由を聞くと、将来自分の日本語能力を用いて活躍するために自身の日本語スキルを磨くため、と答える学生が多かった。日本語に興味を持つきっかけは、映画やドラマ、アニメや漫画などのサブカルチャー由来のものが多いことは知っていたが、そこから翻訳者となってその魅力を伝える役割や、日本語教員となって次世代の育成を担う役割など、将来に対して具体的かつきっかけを大事にするビジョンを持っていることに感銘を受けた。

また、文化的な気づきで最も驚かされたのは、先進的なシステムに溢れていることである。私は今まで中国を訪れたことがなく、中国語の教員や中国出身の教員からの話程度にしか知識を有していなかったが、実際に訪れてみると、現金レス支払いの徹底や、地下鉄の二重扉構造、連結バスなど、日本ではなかなか見られない光景に囲まれていた。大都市ということもあってか、それは途上国というレーベルから私が想像していた北京の光景とは大いに異なっていた。更に、その驚きを実習生や現地の学生と共有することで、日本でも今後このようなシステムを採るのか、その可不可能性や是非について両方の文化的立場から話し合うこともできた。

教員としての学びに関してであるが、前半1週間に授業観察の期間を設けたのはとても効果的であると感じた。私は日本語教育の授業に関して、実戦経験はなく、20分程度の模擬授業2回、授業観察20数回と、お世辞にも多いとは言えない経験を有している。だからこそ、この1週間の観察は教育現場教員の授業を改めて観察する良い機会となり、そのうえ授業参加を通して学生との親睦を深めることができた。その結果、経験に乏しい私でも授業観察をもとに授業を構築し、自分で納得のいく授業を実施することができた。

ただ、学生観の把握だけは1週間という短期間では難しいと感じた。授業観察では授業内の展開・教材・留意点などを把握することができたが、学生の習熟度を理解するには時間が足りないように思われた。例えば、文章を読むことが得意な学生に話を聞いたら、漢字の意味から文章のニュアンスを理解しているだけであることが判明した。また、「質問がありますか」の問いかけに反応しない学生へ、「内容分かった？」のような問いかけを授業後にしたところ、あまり分かっていない様子だった。

この反応から、学生に理解してもらうための授業を作る際、殊にその難易度調整に注意を強いられた。具体例を出すと、初級レベルの学生対象に「環境問題について1つピックアップし、簡潔な説明と対処法を講じ、グループで発表する」という活動をさせる際、話し合いの時間をどの程度確保するか、課題の難易度を下げるかなど、直前まで調整した。

この点より、学生が現在どの程度の習熟度であるか——もちろん学生によって程度の差はあるが——、普段の授業は母語を使ったものであるか、などの情報が事前に伝わっていると、授業観察がより効果的になるのではないかと提言したい。

おわりに、この実習を通して授業の構築方法、現場での実態、使用されている教材などの教員視点からの学びのみならず、学生の実態や学習へのモチベーション、そして中

国文化など、多面的に学びを得ることができた。本実習を実に有意義なものであると感じるがゆえに、来年度の実施も切に願う所存である。その際、本節の提言にも一考の余地があると判断していただければ幸いである。

最後に本実習に参加できたことに心から感謝申し上げる。また、本実習に携わった方々への謝意に代えて、本節の結びとしたい。

4. おわりに

実習期間中、実習生が1人、食当たりになったが、幸い軽症で病院で薬をもらいすぐに治った。今回、トラブルらしいものはこれくらいで、他に何も問題なく過ごすことができた。懸念していた北京の大気汚染もまったくなく、実習期間中雨が降ったのは2回だけで、それ以外は好天に恵まれた。海外へ行くのが初めてという実習生もいたが、トラブルもなく、滞在中の不安は感じなかった。これも BNU の先生方とチューター、そして学生の手助けがあったからに他ならない。先生方には、教案や授業作りに際して適切なアドバイスをいただき、さらに食当たりの際には薬や病院の手配をして心配してくださり、そして、実習生のための歓送迎会を開催していただき、心からの感謝を申し上げる。そして、3人のチューターに対しても、2週間一緒に行動を共にし、多くのサポートをしていただき感謝している。今回の実習がストレスなく終わったのは、彼ら3人のサポートが大きかったのはいうまでもない。

今回の実習では、ここでは書ききれないほど数多くのことを学ぶことができたが、筆者が特に感銘を受けたことを最後に紹介する。これはある先生が実習生に問いかけた時のことである。「あなたたちが持っている中国に対するイメージと、実際の中国を見てどのように感じましたか。イメージと実際には大きなギャップがありますよね。日本でも中国でもメディアは悪いところばかりをクローズアップしてしまい、実際とのギャップが広がって伝わっています。大気汚染や反日感情についてなど。でも実際に訪れた中国はあなたたちが持っているイメージとは全然違いますよね。このギャップを埋めるためには実際に体験することが大事なのです。」現代社会では、情報は簡単に手に入るが、それが正しいかどうかはわからないし、正しくても一部のみに当てはまるものかもしれない。実際の教育現場も中国文化も中国人も、実際に体験しなければ何も本当のことはわからなかっただろう。この海外実習プログラムに、来年以降も多くの埼玉大学の学生が参加し、イメージと実際のギャップを埋めて、人としての成長に繋げて欲しいと切に願う。



故宮博物館

参考文献

- コルトハーヘン, F (2010) 『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』武田信子(監訳), 学文社
- 佐久間勝彦(2014) 「「グローバル人材」の育成はオールジャパンで—青年海外協力隊事業をめぐる杞憂と夢想—」西山教行・平畑奈美(編著)『「グローバル人材」再考』, 100-137, くろしお出版

謝辞

このプログラムの実施に際して、独立行政法人国際交流基金、および埼玉大学教養学部よりご支援していただきましたので、ここに感謝を申し上げます。そして、実習生を快く受け入れてくださった北京師範大学外文学院日本語学部に対しても謝意を申し上げます。それに加え、実習中に多大なるご支援をいただいた北京師範大学の蒋义乔先生、姜弘先生、澤田康德先生、張林先生、程茜先生、劉玲先生、林洪先生、冷丽敏先生に対しても深い感謝を申し上げます。埼玉大学の劉志偉先生には、実習生の引率や実習全般に御尽力してくださいましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。最後に、授業外で私たちをサポートをしてくださったチューターの王永靚さん、向雪嬌さん、陳彦良さん、ありがとうございました。

松本匡史(埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程)

伊澤佳那依(埼玉大学教養学部生)

野崎那由(埼玉大学教養学部生)

町田和輝(埼玉大学教養学部生)